

2022/3/26-2

(うと Q 世話し (続) 野望が生む焦り の曲がり角) 書庫版



「何が何でも自分の代で」

というのは歴史、というよりも歴史「書」の存在を信じているからです。

それは同時に歴史書の「読み手」がいる事を信じているからでもありましょう。

更にはその読み手が「自分の側近や側近の命に嬉々として従う编者」と同じ評価をするものだ」という無意識の前提があつての事でしょう。

しかしまず第一に後代の読み手が必ずしも自分の側近やその命に嬉々として従う编者と同じとは限りません。

次に「生者必滅会者定離」が世の常(=理(ことわり))であるなら読み手である存在がいつかな人類であっても、その「理からの例外扱い」は許されないとすれば、いつか人類は滅している事もありうるわけです。

もし人類がいなくてあれば当然「歴史書」に意味等あろうはずもなく、更に申せば歴史そのものすら「認識する者がいない」という意味で「無かったも同じ事」になってしまいます。

(高度な知能を持った宇宙人、地球外生物がいてそれを解読出来るのであれば別かもしれませんが、彼らの価値観が全く違えば矢張り無意味になるかもしれませんし)

となれば「歴史に名を遺す」為に嘘をつき事実を捻じ曲げながら権力闘争に明け暮れる日々虚しさを覚えませんか？

ましてやその野望の為に犠牲になる人々はたまつたものではありません。

ある人物の「虎は死して皮を残す。人は死して名を遺す」だけ為に。

確かに人類が減るかどうかは我々には分かりません。恐竜が蛇やトカゲのように爬虫類に身を変えて生き残っている例もありますし。

しかしそれは確約されている話ではないでしょう。可能性や確率論の話でしかありません。であるならば、今時点で確実なことを為した方が得策ではないでしょうか？

つまり現時点において不確かなことを追いかける様な虚しい時間の使い方をせずに  
「今確実にあるこの生を十二分に生きる事を第一とする（アタマとところと身体、三位一体  
のフル活用）」

とか

「それ自他ともに分かち合う努力をして現世を暮らし易くする」

とか、或いは

「いずれ滅びるかもしれない可能性があるとはいえ、愛情由来で成る丈長期に渡って後代  
がより暮らし易くなる様に種まきをしていく」

とかに時間を使ってはどうなのでしょう？

嘗て貧しかった頃のわが国では、親は子に少しでも楽な暮らしをさせようと頑張り、子はそ  
の姿を見て「自分が楽になったら、前払いの苦労分を後払いだが楽で返してあげよう」

というエコサイクルが成り立っておりましたが、最近では

親は「自分の代だけ良ければいい」になり、子は「親が子に楽をさせるのは当たり前。死ぬ  
まで面倒見ろよな」になり、今度は自分が親になると「自分の代だけ楽が出来ればいい。後  
代など知った事ではない」の悪循環。

そろそろわが国は曲がり角に差し掛かっているのではないのでしょうか。

外国人と暮らしていると強くその事を感じるようになっております。